

Microsoft Toolkit の説明

Microsoft Office と Windows のライセンス、展開、及びアクティブ化を管理する為の一連のツールと機能です。これらの機能からの全ての出力が情報コンソールに表示されます。

全ての機能はバックグラウンドで実行され、複数の機能が同時に実行されると競合したり損傷を与えたりする可能性がある為、GUI は無効になっています。

Microsoft Office、又は Windows がインストールされていない場合でも、Microsoft Office セットアップカスタマイズ機能（セットアップタブのカスタマイズ）、AutoKMS アンインストーラ（AutoKMS がインストールされている場合）、AutoRearm アンインストーラ（AutoRearm がインストールされている場合）、Office アンインストーラ、及びプロダクトキーチェッカーは機能します。

要件： Microsoft .NET Framework 4.0~4.6
Office ツールキットサポートの為の Microsoft Office 2010 以降
Windows Vista、又は 以降の Windows ツールキットサポート

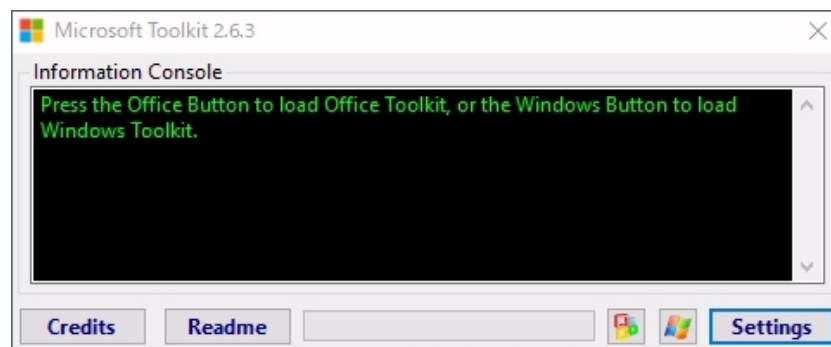


図 1： Microsoft Toolkit 起動時の画面

Microsoft Toolkit の機能

Main Tab (メインタブ) :

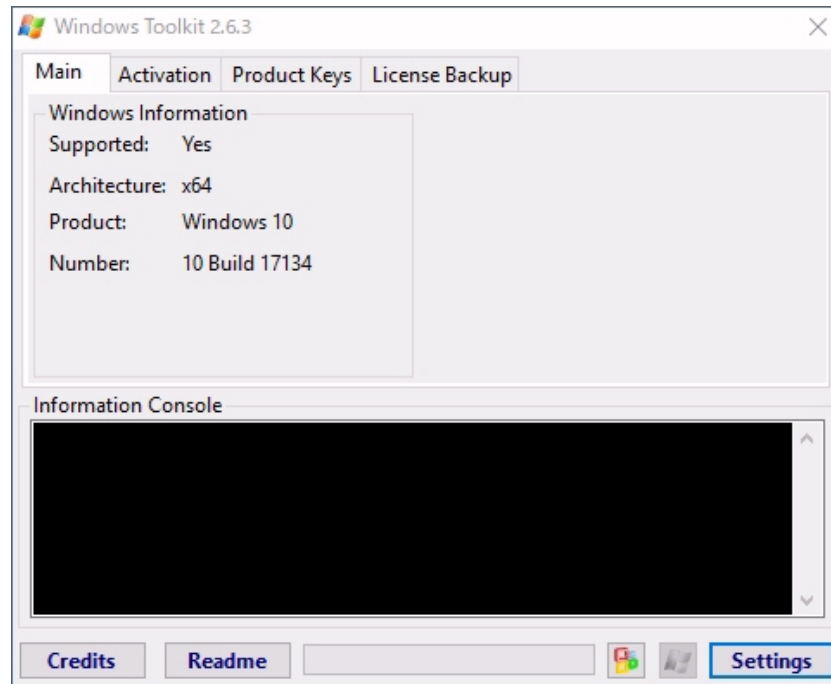


図 2 : Main タブ画面

Office Information (オフィス情報) : Microsoft Office が、PC にインストール、サポートされており、動作する OS のアーキテクチャ環境が、32 ビット (x86)、64 ビット (x64) の何れであることを示します。製品版とバージョン番号も表示されます。

Windows Information (Windows 情報) : Microsoft Windows が、PC にインストール、サポートされており、動作する OS のアーキテクチャ環境が、32 ビット (x86)、64 ビット (x64) の何れであることを示します。製品版とバージョン番号も表示されます。

Activation Tab (アクティベーションタブ) :

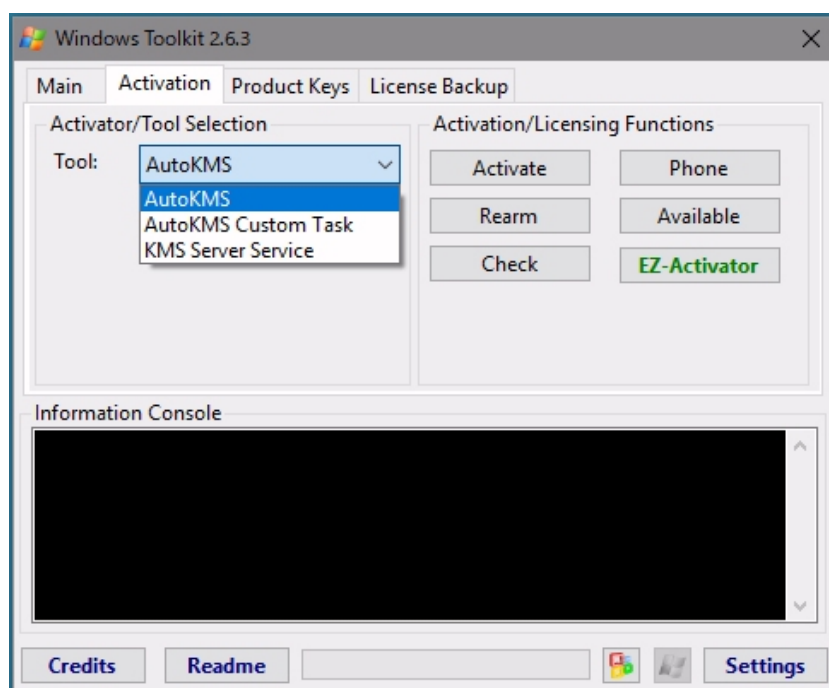


図 3: Activation タブ画面

AutoKMS : AutoKMS は、180 日の KMS アクティベーションを更新する予定のタスクです。他の KMS アクティベーターとは異なり、AutoKMS は 24 時間 365 日に実行されません。又、失敗しない事を望み、最後の 1 分だけ実行されます。スケジュールされたタスク、ログ、及び exe ファイル以外のトレースは有りません。KMS ライセンスのアクティベーションのみを試みます (MAK や Retail 等の KMS 以外のライセンスを使用している場合は、多くの時間を節約できます)。起動時、ログイン時、24 時間毎に実行され、KMS のアクティベーションを試みます (タスクスケジュールは変更できません)。Install/Uninstall ボタンは、AutoKMS のインストール又は、削除に使用されます。

AutoKMS Custom Task : デフォルトの AutoKMS Scheduled タスクを、リセットされないカスタムタスクに置き換えます。タスクスケジューラーでトリガー (タスクを実行する際の一連の条件) をカスタマイズできます。

KMS Server Service : KMSEmulator を Windows サービスとしてインストールし、自動的に実行して起動し、PC を KMS サーバーに変えてネットワーク経由で他のクライアントをアクティブにする事ができます。

注 : このサービスは C++ で作成されており、C# .NET では作成されていません。AV とファイアウォールがこのサービスを除外して他のクライアントをアクティブにしたい場合が有ります。

注 : 一部のオペレーティングシステム (これらの OS 上の Microsoft Windows 8.1/Server 2012 R2、及び Microsoft Office 2013) によって、LocalHost KMS のアクティベーションがブロックされます。

KMS Server Service を使用して自分の PC をアクティブ化する場合は、KMS Server Service と共に AutoKMS をインストールし、LocalHost Bypass メソッドを使用できます。

Activate (Attempt Activation) : Microsoft Office、又は Windows の全ての製品を有効にしようとします。(ツールキットモードによって異なります) オンライン、及び MS アクティベーションが実行されます。

Phone (Attempt Activation) : これにより、Phone (電話) が有効になっていて、未だアクティブ化されていない、全ての Microsoft Office、又は Windows 製品 (ツールキットモードに応じて) がアクティブ化されます。Phone のアクティベーションでは、マイクロソフトを呼び出す事で取得した確認 ID を入力する必要があるありますが、後で使用する為に保存します。

Rearm : これにより、Microsoft Office、又は Windows の全ての製品 (ツールキットモードに応じた) に含まれる 30 日間の猶予期間がリセットされます。Rearm 数は限られているので、Rearm 数を確認して下さい。全ての製品が猶予期間を提供するわけではありません。

Available (Get Rearm Count) : 使用可能な Rearm 数を表示します。

Check (Check Activation Status) : ライセンスの取得日数、使用しているプロダクトキーとライセンスのタイプ等、Microsoft Office、又は ツールキットモードによる Windows のアクティベーションに関する詳細情報が表示されます。

EZ-Activator : このボタンをクリックする事で、KMS アクティベーションの簡単な設定を行う事ができます。以前のバージョンとは異なり、Retail License を使用している場合、KMS ライセンス認証は使用できません。EZ-Activator は、ライセンスの状態に関する情報を収集して、最適なライセンス認証方法を提供します。アクティベーションに失敗した場合に自動的に修正を試み、失敗した場合には全ての変更を元に戻す事ができます。システムに全ての KMS キーを自動的にインストールし、KMS ライセンスのみのアクティベーションを試み、成功した場合は AutoKMS を自動的にインストールします。

Product Keys Tab (プロダクトキータブ) :

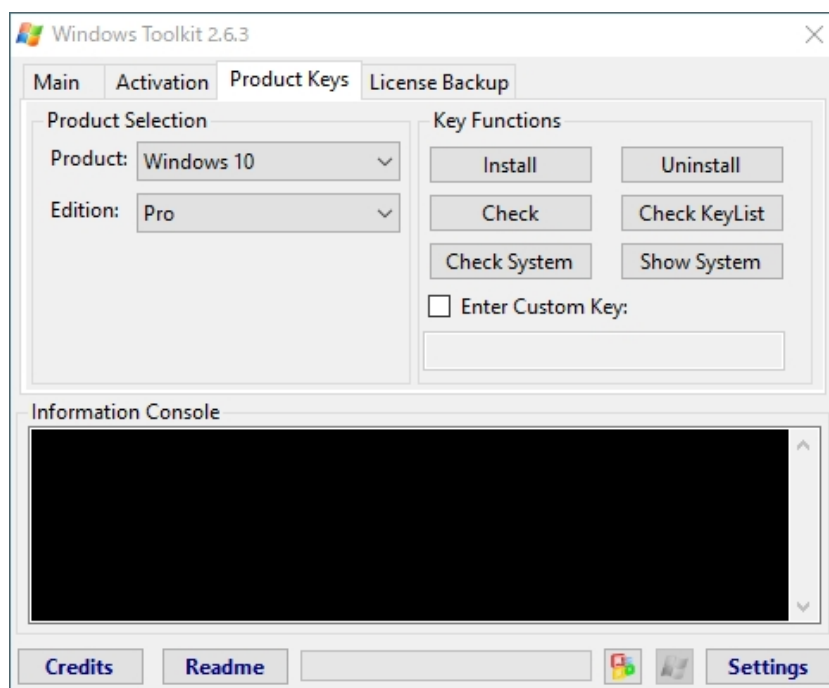


図 4: Product Keys タブ画面

Install: これは、選択した製品キー、又は入力したカスタムプロダクトキーの何れかを使用してプロダクトキーをインストールします。そのライセンスがインストールされていない限り、プロダクトキーをインストールする事はできません。

Uninstall: これにより、選択した製品キー、又は入力したカスタムプロダクトキーが削除されます。

Check: これは、選択した製品キーまたは入力したカスタムプロダクトキーの何れかを使用してプロダクトキーに関する情報を提供します。この情報は、PIDX チェッカーから得られる情報です。

Check Key List: クリップボードと選択したファイルを読み取る事ができるフォームを使用して取得した複数のプロダクトキーを確認します。全てのプロダクトキーは、これらのソースからの正規表現を使用して検索され、保存されます。完了したら、これらの全てのプロダクトキーがチェックされます。

Check System: Microsoft Office、又は Windows 製品のレジストリ、及び MSDM テーブルに有る製品キーを読み取り (Toolkit モードに応じて) チェックします。注: プロダクトキーは存在しないか、隠れているか、実際にはインストールされていない可能性が有ります。

Show System: Microsoft Office、又は Windows 製品のレジストリ、及び MSDM テーブルに有る製品キーを読み取り表示します。注: プロダクトキーは存在しないか、隠れているか、実際にはインストールされていない可能性が有ります。

License Backup Tab (ライセンスバックアップタブ) :

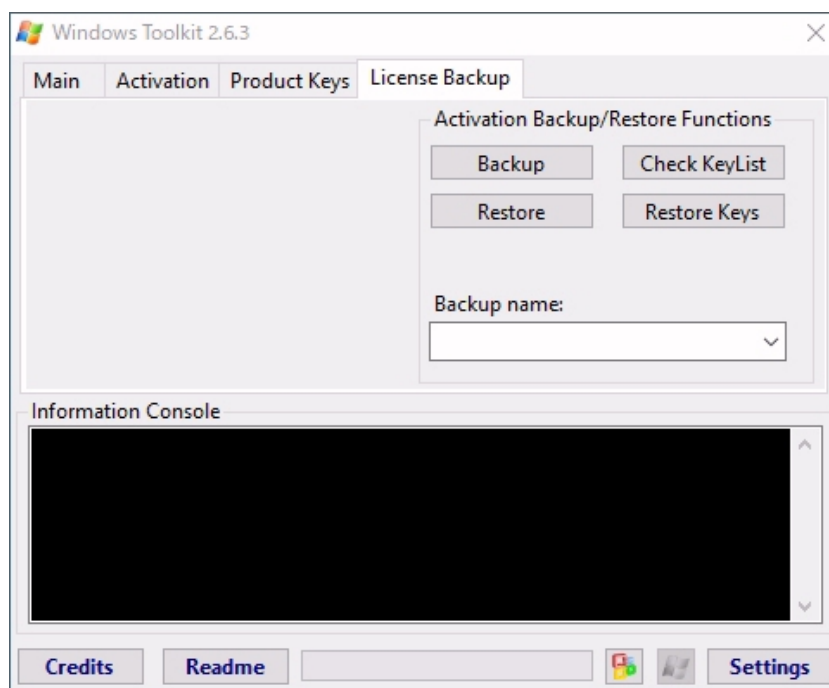


図 5: License Backup タブ画面

Backup: これにより、Microsoft Office、又は Windows 製品のライセンス情報が (ツールキットモードに応じて) 保存される為、後で復元する事ができます。

この情報は機器固有で有る為、異なるハードウェアでは動作しません。現在の状態は保存されますが、時計は停止しません。従って、KMS、或いは試用版のライセンスを使用している場合は、バックアップを取った日の 25 日前のバックアップが復元されます。バックアップは、「Main」タブに表示されている Product 名に基づいて、Backups フォルダのサブディレクトリに格納されます。

Backups フォルダは、入力した名前を使用して Microsoft Toolkit 実行可能ファイルと同じディレクトリに作成される為、Microsoft Toolkit が読み取り専用ディレクトリから実行されていない事を確認して下さい。

Restore: 以前のバックアップで保存された全ての情報を復元します。現在の状態を一時的にバックアップし、現在の状態を削除してバックアップを復元します。復元に失敗すると、一時的なバックアップを復元しようとします。これを行うには、リストアが完了する前にライセンス認証を使用しないように、インターネット接続を無効にする必要が有ります。

Check Key List: Keys.ini の全てのキーを指定したバックアップ用にチェックします。

Restore Keys: バックアップの保存されたプロダクトキーの再インストールを試みますが、ライセンスの変更や復元は行いません。インストール可能なキーを持つ MAK をバックアップしたが、電話を有効にしたい場合に適しています。

Microsoft Toolkit の設定

Toolkit 画面右下の「Settings」ボタンをクリックすると以下の画面が表示されます。

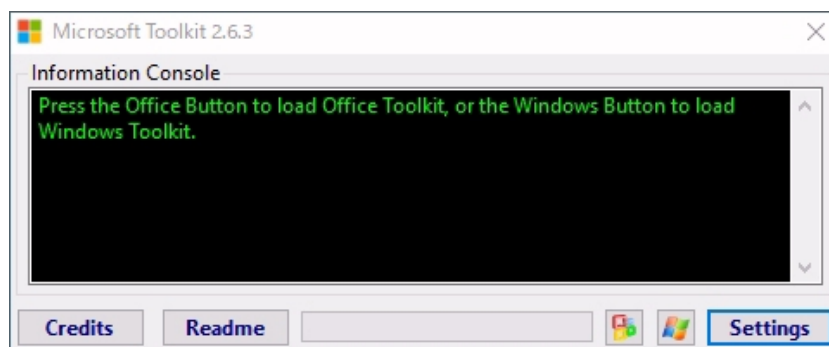


図 6: Settings ボタン

KMS Options Tab (KMS オプションタブ) :

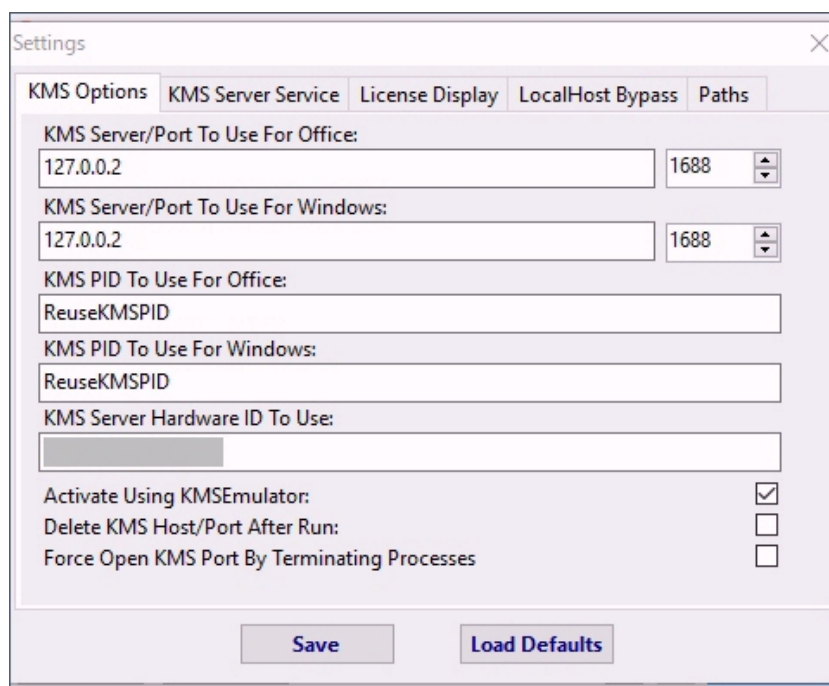


図 7: KMS Options タブ画面

KMS Server/Port to Use: KMS のアクティベーションを試みる時に使用する KMS サーバーとポートを設定できます。実際の KMS サーバー、又は KMS エミュレーターやサーバーを実行しているネットワークホストを持っていない場合は、127.0.0.2 に設定します。数値ボックスの表示は使用されるポートです。KMSEmulator は、このポートを使用しますが、PC 上で開いている必要が有ります。又、使用しているプロセスが終了する場合があります。

注: Office KMS サーバー/ポートは、Windows ベースの製品をアクティブ化する時に、Office ベースの製品、及び Windows KMS サーバー/ポートをアクティブにする時に使用されます。

KMS PID to Use: KMS のアクティベーションを試みる時に KMSEmulator が使用する KMS 拡張 PID を設定できます。PID を変更する事で、永続的な KMS のアクティベーションの失敗や KMS の正常な検証の失敗を修正できますが、殆どの場合、このままにしておきます。有効な KMS PID、文字列 DefaultKMSPID を渡して、ハードコードされた既定値 (BLACKLISTED ! DO NOT USE !)、文字列 RandomKMSPID を使用して KMS PID 形式に一致するランダムな文字列を生成するか、文字列 ReuseKMSPID を使用して、KMS PID が見つからない場合はランダム KMS PID を生成します。注： Office ベースの製品をアクティブ化する時には Office PID が使用され、Windows ベースの製品をアクティブにする時は Windows の PID が使用されます。注： 実際の KMS サーバーの KMS アクティベーションに使用する KMS PID は変更できません。KMS サーバー、又は KMS PID が正規の検証に失敗した場合、この設定はブロックされていない KMS PID で有る必要が有ります。

KMS Server Hardware ID to Use: KMS をアクティブ化しようとする時に、KMSEmulator が使用する KMS サーバーハードウェアハッシュ (KMS V6 に追加されたもの) を設定できます。ハードウェア ID を変更する事で、KMS が正常に動作しない状態を修正できますが、殆どの場合、このままにしておきたいと考えます。有効な 16 進文字 (0-9、A-F) のみを含む 16 桁の文字列を渡す必要が有ります。注： 実際の KMS サーバーの KMS アクティベーションに使用する KMS ハードウェア ID は変更できません。KMS サーバー、又は KMS ハードウェア ID が正規の検証に失敗した場合、この設定はブロックされていない KMS ハードウェア ID である必要が有ります。

Activate Using KMS Emulator: KMS エミュレーターを使用して KMS のアクティブ化を実行します。KMS エミュレーター、サーバーを実行している実際の KMS サーバー、又はネットワークホストを使用している場合を除き、これを有効にする必要が有ります。

Delete KMS Host/Port After Run: KMS の有効化後にレジストリから KMS サーバー名とポートを削除します。

Force Open KMS Port by Terminating Processes: KMS エミュレーターをそのポートで実行できるように、KMS ポートを使用するプロセスを全て終了します。

KMS Server Service Tab (KMS サーバーサービスタブ) :

現時点では、操作方法が手探り状態なのでデフォルト起動でこのタブを表示しても、下図のように設定欄が全てアクティブにならないようです。

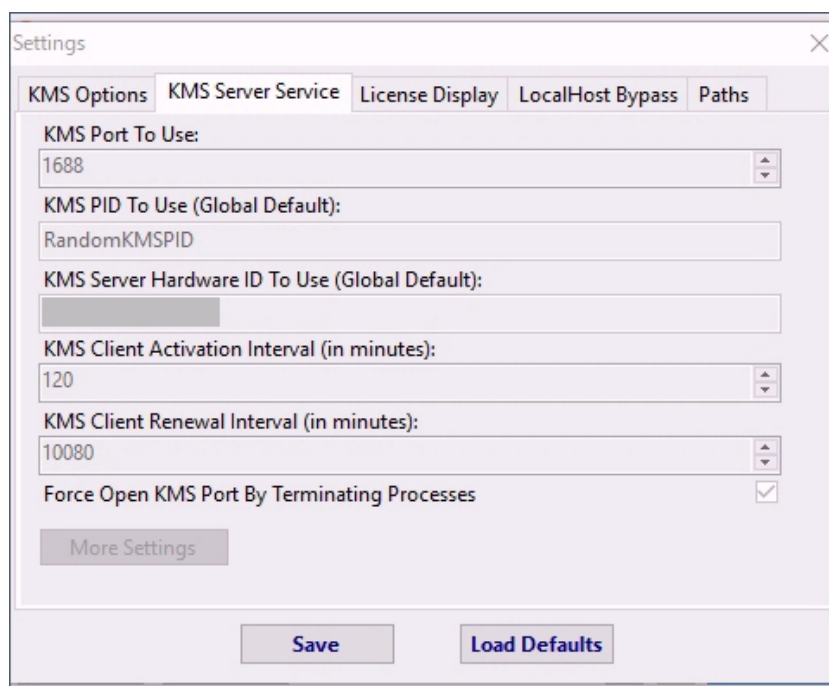


図 8 : KMS Server Service タブ画面

KMS Port to Use: KMS サーバーサービスが受信する KMS ポートを設定できます。このサービスを使用する全てのクライアントは、この KMS ポート (1688) を使用する必要が有ります。

KMS PID to Use (Global Default): KMS ライセンス認証応答を KMS クライアントアプリケーションに送信するときに、このサービスが使用する KMS 拡張 PID を設定できます。有効な KMS PID、又は 文字列 RandomKMSPID を渡し、KMS PID 形式に一致するランダムな文字列を生成する事ができます。

KMS Server Hardware ID to Use (Global Default): KMS ライセンス認証応答を KMS クライアントアプリケーションに送信する時に、このサービスが使用する KMS サーバーハードウェアハッシュ (KMS V6 に追加) の設定を可能にします。有効な 16 進文字 (0-9、A-F) のみを含む 16 桁の文字列を渡す必要が有ります。

KMS Client Activation Interval: タイマーを、KMS サーバーに対してアクティブ化する前に、非アクティブ化された KMS クライアントが待機する時間を分単位で設定します。

KMS Client Renewal Interval: 既にアクティブ化されている KMS クライアントが KMS サーバーに対して再アクティブ化する迄待機する時間を分単位で設定します。

Force Open KMS Port by Terminating Processes: KMS ポートを使用して任意のプロセスを強制終了し、そのポートで KMS サーバーサービスを実行できます。

KMS Server Service More Settings Window: (この場合は More Settings ボタンがアクティブ化できません)

License Display Tab (ライセンスディスプレイタブ) :

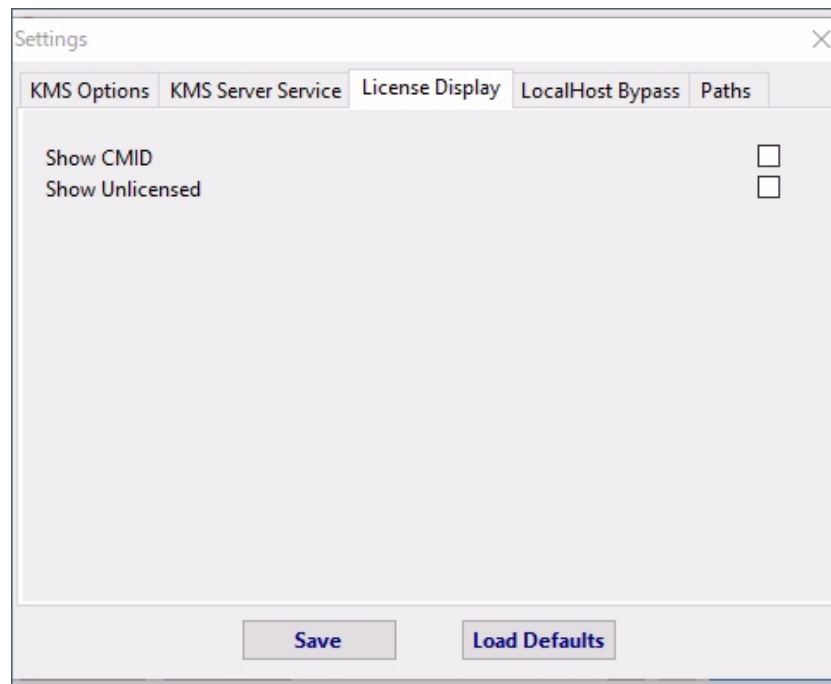


図 9 : License Display タブ画面

Show CMID: KMS クライアントマシン ID を表示します。KMS を使用しておらず、アクティベーションを要求していない場合は、1 つも持っていません。

Show Unlicensed: インストール可能な全てのプロダクトキーが表示されます。これを表示すると、トラブルシューティングに役立ちます。

LocalHost Bypass Tab (ローカルホストバイパスタブ) :

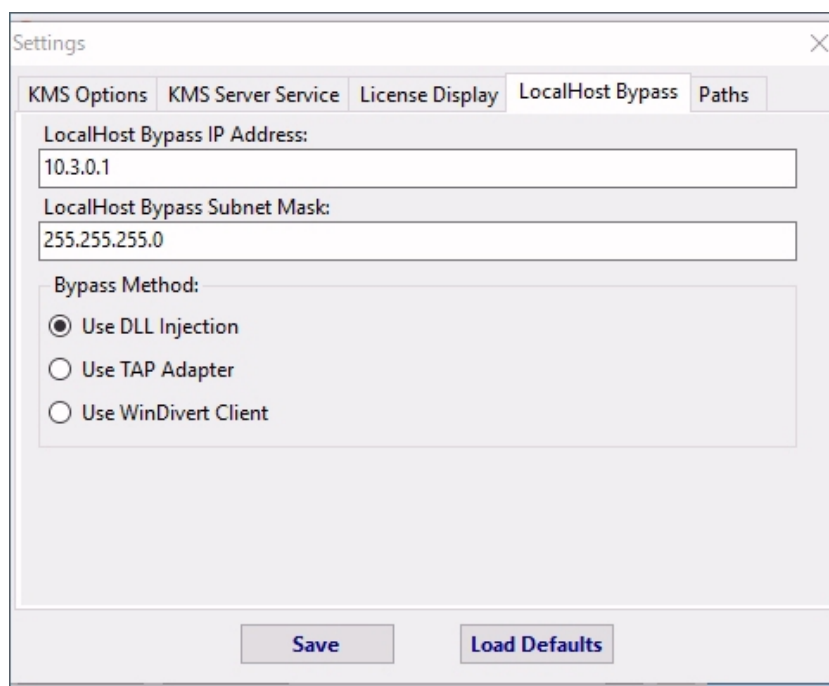


図 10 : LocalHost Bypass タブ画面

LocalHost Bypass IP Address: LocalHost に対してアクティブ化できない KMS クライアントの場合は、バイパス方法が必要です。これは、Bypass メソッドによって偽装される IP アドレスです。

LocalHost Bypass Subnet Mask: LocalHost に対してアクティブ化できない KMS クライアントの場合は、バイパス方法が必要です。これは、バイパス方法で偽装されるサブネットマスクです。

Use DLL Injection: KMS リクエストを LocalHost にリダイレクトするライセンスコンポーネントに DLL を注入し、偽装された IP アドレスがソースで有ると信じるようにライセンスを欺きます。

Use TAP Adapter: ネットワークアダプターとリスナーを使用してパケットをキャッチし、送信元と送信先の IP アドレスを逆にして KMS クライアントに返します。

Use WinDivert Client: TCP/IP クライアントをエミュレートしてパケットをキャッチし、送信元と宛先の IP アドレスを逆にして KMS クライアントに返します。

Paths Tab (パスタブ) :

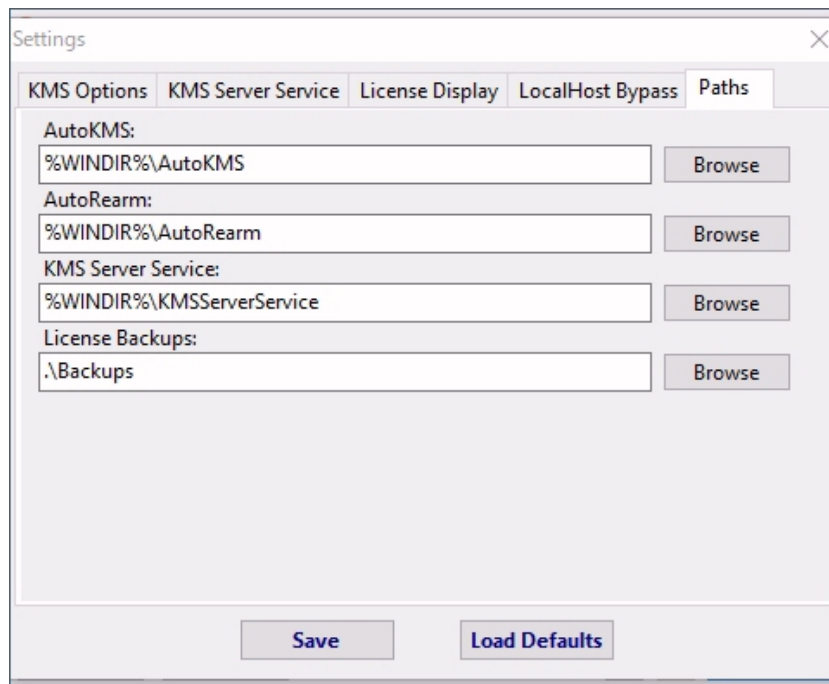


図 11 : Paths Tab タブ画面

AutoKMS: AutoKMS をインストールする場所を選択します。

AutoRearm: AutoRearm をインストールする場所を選択します。

KMS Server Service: KMS サーバーサービスをインストールする場所を選択します。

License Backups: ライセンスバックアップを保存する場所を選択します。